

スピーチ場面における社交不安者の注意

— 社交不安のサブタイプによって注意の方向性は異なるか —

○松本美涼・藤原裕弥

(安田女子大学心理学部)

目的

社交不安の認知モデルでは注意が症状に与える影響が検討されている。Clark & Wells(1995)のモデルでは、症状を維持する要因として心臓がドキドキする手に汗をかいているなど、自己の内的な情報に対する注意(自己注目)が挙げられている。対して、Rapee & Heimberg(1997)のモデルでは、自己注目に加えて、聴衆のしぐさや表情などの他者に対する注意(他者注目)が要因として挙げられており、両モデルの主張は異なっている。これまで、スピーチ場面を用いて、この点が検討されてきたが、結果は一致していない(Perowne & Mansell, 2002・河崎, 2009)。

本研究では、このような結果の不一致を引き起こす要因として、社交不安者のサブタイプに着目した。清水・川邊・海塚(2007)は、対人恐怖心性と自己愛傾向の組み合わせによって4類型を作成している。その中で、高対人恐怖心性を、a 他者評価に依存的で他者の視線に敏感な誇大-過敏特性両向型(両向型)、b 自己を見つめることで自己の印象を形成する過敏特性優位型(過敏型)の2類型に分類している。このことから、両向型は表情などの他者情報に注意を向けやすく、過敏型は自己に注意を向けやすいと考えられる。したがって、両向型は他者情報によって不安が喚起されやすいため、他者を観察可能な状況で不安が喚起されやすく、過敏型は他者を観察不可能な状況でも不安が喚起されやすいと考えられる。

そこで、本研究ではスピーチ中に評価者の様子が表示される条件(観察可能条件)と表示されない条件(観察不可能条件)を設定し、類型ごとの注意対象と不安気分について検討を行う。

方法

参加者：短縮版対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度(2008)の回答が得られた大学生15人

質問紙：不安気分を測定するために、State-Trait Anxiety Inventory 日本語版(清水・今栄, 1981)のA-Stateと注意対象を測定するために、The Focus of Attention Questionnaire(Woody, 1996)を本実験用の一部変更して用いた。

手続き：不安気分の測定を行った後、評価者がスピーチを評価していると教示を行い、評価者がスピー

チを評価している映像がモニターに表示される状態(観察可能条件)と表示されない状態(観察不可能条件)でスピーチを行った。各スピーチ終了後、不安気分と注意対象の測定を行った。

課題：スピーチテーマは、「学生時代一番頑張ったこと」「友人には知られていない私の以外な一面について」とした。

結果と考察

類型別に不安気分とスピーチ状況の関連性の検討を行った。条件(観察可能・観察不可能)×類型(過敏型・両向型・低群)の2要因分散分析を行った。その結果、類型と条件の交互作用は認められなかった。しかし、両向型は観察不可能条件より観察可能条件において、不安気分が高い傾向が示されたことから(Fig. 1)、両向型は他者情報により不安を喚起しやすいと考えられる。

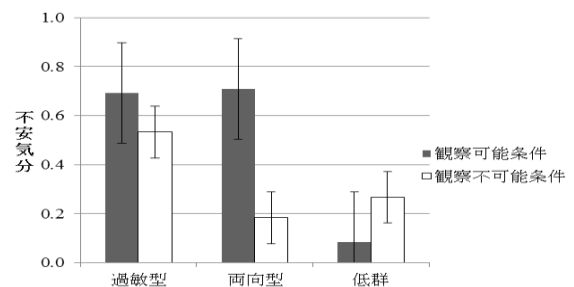


Figure 1 各類型におけるスピーチ中の不安気分

次に、類型と注意対象の関連性の検討を行った。類型×注意対象×条件の3要因分散分析を行った。その結果、注意対象の主効果が認められ、他者よりも自己に対して注意が向けられたことが示された。また、条件と注意対象の交互作用が認められ、観察可能条件で他者注目が高いことが示された。しかし3要因の交互作用は認められなかった。

これらの結果から、スピーチ場面のような社交不安状況では、自己注目が高まることが示され、先行研究を支持する結果であった。しかし、注意対象に対する類型の効果は認められなかった。両向型は高い理想自己を持ち理想自己が傷つく可能性を察知すると回避的な態度を示すことが指摘されている。そのため、他者に対する回避的な注意を示した可能性があると考えられる。